

2 0 2 6 年 度

法 学 部 学 校 推 薦 型 選 抜 I 入 学 試 験

問 題 紙

小 論 文

4 ページ

解答の書き方

1. 解答は解答用紙の所定の欄に、はっきりと記入すること。
2. 受験番号は、必ず解答用紙に記入すること。
3. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
4. 解答用紙には、解答と受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注 意

1. 監督者の「解答始め」という指示のあるまで、問題紙を開かないこと。
2. 「解答始め」の合図と同時に、解答用紙に受験番号を必ず書くこと。ただし、氏名は記入しないこと。
3. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、問題紙にページ不足・不ぞろい・印刷不良があるなど、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
4. 問題紙と下書用紙は持ち帰ること。

問題 以下の【論説A】【論説B】を読んで、後の問いに答えなさい。

【論説A】

著作権者の許諾が得られないため、本文を省略しています。

著作権者の許諾が得られないため、本文を省略しています。

【論説 B】

組織における集合的な意思決定の仕組みの可能性について、初めて本格的に論じたのがルソーでした。彼は、著書『社会契約論』の中で、市民全体の意志を「一般意志」という概念で定義し、代議制にも政党政治にもよらない「一般意志に基づいた統治」こそが理想であるという考えを提唱しました。ルソーの説いた一般意志は非常に奇妙な概念で、多くの後世の社会学者や思想家を困惑させているのですが、現在の水準まで発達したデジタルテクノロジーとネットワークを活用すれば、これが可能になるかも知れない、と指摘しているのが思想家の東浩紀です。少し長くなりますが抜粋しましょう。

民主主義は熟議を前提とする。しかし日本人は熟議が下手だと言われる。AとBの異なる意見を対立させ討議のはてに第三のCの立場に集約する、弁証法的な合意形成が苦手だと言われる。だから日本では二大政党制もなにもかもが機能しない、民度が低い国だと言われる。けれども、かわりに日本人は「空気を読む」ことに長けている。そして情報技術の扱いにも長けている。それならば、わたしたちはもはや、自分たちに向かない熟議の理想を追い求めるのをやめて、むしろ「空気」を技術的に可視化し、合意形成の基礎に据えるような新しい民主主義を構想したほうがいいのではないか。そして、もしその構想への道すがらルソーによって2世紀半前に引かれていたのだとしたら、そのとき日本は、民主主義が定着しない未熟な国どころか、逆に、民主主義の理念の起源に戻り、あらためてその新しい実装を開発した先駆的な国家として世界から尊敬され注目されることになるのではないか。

民主主義後進国から民主主義先進国への一発逆転。

東浩紀『一般意志 2.0 ルソー、フロイト、グーグル』

初めてこの提言に接した時には、とても興奮したことをよく覚えています。(中略) ICT の力によって古代ギリシアの直接民主制を、より洗練された形で復活させることができるかも知

れません。これは確かに熟議の下手な日本人にとっては明るいビジョンです。しかし、地に足をつけて考えてみれば、このビジョンには大きなボトルネックがあることに気がつきます。それは「誰が一般意志を汲み取るシステムを作り、運営するのか」という問題です。

東浩紀は、集合知を不特定多数から吸い上げる技術の成功事例としてグーグルを挙げており、同様の仕組みを拡張させて社会運営における意思決定に活用できるのではないかという論旨を述べているのですが、グーグルはその秘密主義で悪名高く、検索結果を導出するアルゴリズムはブラックボックスになっていてごく一部の関係者しかアクセスできません。つまり、グーグルが依拠している民主主義（と彼らが呼ぶもの）は、一部のごく限られた人にしか関与できないアルゴリズムとシステム、つまりテクノクラートによって運営されているわけで、本質的なパラドクスを含んでいるのです。

市民全員の一般意志を吸い上げるためのシステムとアルゴリズムがごく一部の人のによって制御されるのであれば、そのシステムから出力される一般意志が本当に市民のそれを代弁するものであるかどうかは誰にも保証できないでしょう。むしろ、そのような「極端な情報の非対称性」を孕んだシステムが絶対的な力を持てば、ジョージ・オーウェルが『1984年』で描いたビッグブラザーと同様の「絶対権力」に墮する可能性もあります。

<中略>

さて、個人の人格や見識が反映されない集合的な意思決定のシステムには、このような危険性が潜むことは確かでしょう。「膨大な量のデータを集めて解析した結果、あなたが社会から抹殺されることで社会全体が大きな利益を得るという結果が出ました」と当局から通告されるようなことが起こり得るのであれば、このようなシステムに大きな権限を与えることは倫理的に許されないように思えます。

しかし一方で、集合的に情報処理に基づく意思決定が、個人のそれとは比較にならないほど高い品質の意思決定を可能にすることがあるのも、また事実です。

<中略>

人工知能や通信技術がここまで進んだ状況下において、古代ギリシアで行われていたものと本質的に変わらない民主主義運営の仕組みを、私たちは本当に維持し続けるのか、あるいは進化するテクノロジーを何らかの形で私たちの社会運営に用いるのか。現在の社会運営のやり方に多くの人が限界を感じていることは事実ですが、だからといって、プロセスのブラックボックス化を招きかねない一般意志による運営には大きなリスクも含まれています。この間のどこに落としどころを作っていくのかは、21世紀を生きる私たちに向けられた最も大きな問いの一つだと思います。

出典

【論説A】冷泉彰彦『「関係の空気」「場の空気」』（講談社,2006年）より一部抜粋。ただし出題にあたり、一部を改変した。

【論説B】山口周『武器になる哲学 人生を生き抜くための哲学・思想のキーコンセプト 50』（KADOKAWA,2018年）より一部抜粋。ただし出題にあたり、一部を改変した。

問1 「空気を読む」ということの捉え方が、【論説A】と【論説B】とではどのように異なっているか、400字以内で述べなさい。

問2 【論説B】の下線部で述べられている提案について、あなたはどのように考えますか。600字以内で自由に論じなさい。